

Forum DOUGUOLOGY Study on Tools
道具学論集 第24号 (2018年度)
2019年3月31日発行

戦時期における代用材料としてのレコード盤

—画鋏の実物資料を用いた実証的研究—

SP Records as a Substitutional Material during War: A Demonstrative Study of Thumbtacks

木村 源知

Genti KIMURA

■
道 具 学 会
Forum DOUGUOLOGY
■

戦時期における代用材料としてのレコード盤 —画鋏の実物資料を用いた実証的研究—

SP Records as a Substitutional Material during War: A Demonstrative Study of Thumbtacks

木村 源知
Genti Kimura

Abstract

In Japan, mainly during the Asia-Pacific War, SP records were used as a substitutional material to make various daily necessities. However, the actual circumstances of the manufacture are still unknown due to the lack of documents and real objects. In particular, we can recognize a diversity of traditions regarding the kinds of SP records that were used, e.g., those collected as waste items, those containing music of the enemy, or faulty records.

I have been collecting thumbtacks made of SP records in wartime for 20 years. This study aims to extract information on the original SP records by analyzing fragments of record labels that remain on the thumbtacks. The results clearly show that the thumbtacks were made of various SP records of different makers, ages, and genres of music. This is the first demonstrative study suggesting the diversion from SP records collected as waste items to substitutional material for daily necessities.

[Key words: SP records, Substitutional material, Thumbtacks, Asia-Pacific War]

要旨

SPレコード盤は、アジア・太平洋戦争期を中心に、様々な日用品を製造する際の代用材料として利用されていた。しかし当時の文献や実物資料はほとんどなく、その実態は不明である。材料となった盤の出処についても、廃品として回収された盤、敵性レコードの盤、ミスプレス盤と、諸説が存在する。

筆者は20年にわたりレコード盤製画鋏の実物資料を発掘・収集してきた。本研究では、画鋏に残されたレーベルの断片を詳細に分析することで、元の盤の同定を試みた。結果として、画鋏には様々な製造者・製造時期・曲種の雑多なレコード盤が用いられていた事実が明らかとなった。これは廃品回収で集められたレコード盤が、代用材料として利用されていたことを、初めて実証的に示す結果といえる。

[キーワード：SPレコード、代用材料、画鋏、戦時期]

1. 背景・目的

アジア・太平洋戦争期を中心とする昭和の戦時・戦後期には、日用品を作るための代用材料として、SPレコード盤が利用されていた^(注1)。これまで楽曲の資料としてSPレコードを取り扱った研究は数多く行われてきたが、代用品^(注2)の材料としての側面に光を当てた研究は皆無である。これはアジア・太平洋戦争期の文献の少なさに加え、レコード盤はいったん加熱再成形されてしまえば、元の材料がレコード盤であるかどうかの判別ができなくなり、仮に実物資料が現存してい

たとしても、研究に資することができなかったためと考えられる。

筆者は別稿「戦時期における金属代用品の多様性と変遷—画鋏に着目した事例研究—」[木村2016]で、戦時期に製造されたレコード盤製画鋏の実物資料を発掘し、記載を行った。その結果レコード盤製画鋏は、くり抜いたレコード盤に針を埋め込むだけ、という簡単な製法で作られており、レーベルなど元のレコード盤（以下、元盤）の状態が良く保存されていることが明らかとなった。

代用材料としてのレコード盤に言及した文献は、ほぼ近年のものに限定されており、しかもどのような盤が利用されたかについては諸説が見られる。岡田[1991a]は、廃品回収で集められた古レコードで電気ソケットや朱肉容器を製造した事例や、廃レコードを燃やした際に出る黒煙で墨を製造した事例を伝聞として紹介している。一方、松尾[2007]には、「レコードを打ち抜いて画鋏の頭としました。ターゲットとなったのはジャズやロックのように『敵性音楽』とされたもの、恋愛物のように『時局に相応しくない』とされたものなどです」との記述が見られる。また画鋏メーカーの株式会社ミツヤには、「1941（昭和16）年から1945（昭和20）年半ばにかけて、ミスプレスのレコード盤で画鋏を製造した」との伝承がある^(注3)。これら諸説は必ずしも相反する性質のものではないが、主意のばらつきが大きく、文献や実物資料による検証が不可欠である。現時点でその鍵となるのは、元盤に關す

る情報が残されている画鋲の実物資料のみである。

代用品の研究からは、「国家が生活の隅々にまで介入した時代に、国民はどのように生活していたのか」、「日本のような資源に乏しい国において、民需の重要物資が不足した場合、どう国民生活が変化するか」という、生活に密接に関わり、かつ普遍性のある視座が与えられる〔木村 2016〕。特にレコード盤が日用品の材料に用いられていた事例は、音楽史・プラスチック史においても極めて特異で興味深い。

以上を踏まえ本研究では、レコード盤製画鋲の実物資料に残されたレーベルの断片を詳細に分析することで、元盤に関する情報の抽出を試み、代用材料としてのレコード盤利用の実態に迫ることを目的とする。

道具学は「何らかのかたちで人間によってデザイン（発想／設計）され作られたモノが人間生活のなかでどのように使われ、価値づけられているかを探る文化学」としての側面があり、その論考は「物言わぬ道具に何をどう語るか」がキーポイントとなる〔面矢 2017〕。本研究が試みる手法は、道具の実物資料の新しい活用例として、この分野の発展にも寄与するものと期待される。

2. 戦時期のレコード

本章では戦時期のレコードに関する様々な事象を、文献や法令を統合して概観する。本章における文献の引用では、仮名づかいは変更せず、旧漢字のみ新漢字に改めている。本稿を通して、年号は西暦を基本とするが、多くの場合、元号も括弧書きで併記した。また便宜上、元号のみを用いる場合もある。

2-1. レコードの材料難

SPレコード盤は、シェラックを中心に、数種の増量剤、充填剤、補強材、顔料等の材料を加熱・捏和して製造される〔大西 2016〕。種類や配合は製造者独自のもので、同じ製造者でもロットによって異なる可能性が指摘されているが〔大西 2016〕、教育文化用品工業研究会〔1950：428－429〕の例では、シェラック 27.0%、マイカパウダー 21.6%、タールピッチ 20.0%、コーパルガム 13.5%、ステアリン酸 10.8%、ロゼン 5.4%、カーボンブラック 1.6%、クレー 0.1%、となっている（重量比）。以下、日中戦争期とアジア・太平洋戦争期における主要材料（シェラック、コーパルガム、カーボンブラック）の供給状況について述べる。

2-1-1. シェラックとコーパルガム

シェラックは、ラックカイガラムシやその近縁種のカイガラムシから分泌される虫体被覆物（＝ラック）を精製して得られる天然樹脂である。日中戦争期の文献によると、当時のラックの世界生産高は、インドが9割以上を占め、残りがビルマ、タイであった〔大阪市産業部 1939：103〕。用途の第1位はレコード製造で、全生産高の4割を占めていたが、次いで保護・絶縁材として砲弾・タンク船・水槽等の内側塗料にも用いられており〔大阪市産業部 1939：108－109〕、軍需用途も多かった。一方、コーパルガムは木の化石や生木から採取される天然樹脂で、原産地は東南アジアであった〔倉田 2006：227－228〕。

シェラックの日中戦争期の入手状況は、「事変以来次第に不足し、昨今は、蘭印の通商条約廃棄（注4）と共に殆ど杜絶の状態にある」〔青木謙 1941〕とあるように、極めて悪化していた。コーパルガムも同様な杜絶状態にあったようである〔倉田 2006：227－228〕。またシェラックの軍需が増加し、レコード用の資材は逼迫した〔青木誠 1941b〕。このことは、レコード製造業者である株式会社日本ポリドール蓄音器商会（以下、日本ポリドール）が、『『セラック』及『コーパルガム』代用樹脂の製造』という題目で、商工省工務局の代用品製造試験費補助金（1938年度）に申請を行った結果、他の8件とともに「代用品工業振興上最も緊要」と評価・採択された事実からも裏付けられる〔商工省工芸指導所 1939〕。

一方、アジア・太平洋戦争期は、日本が南方に進出したことで、材料の確保は当初やや楽観視されたようである。例えば増澤他〔1943, 安藤発言〕には「大戦果に依り泰方面からシドラック（注5）が手に入りました。これは泰において殆ど日本の全需を賄つてなほ余りあるほどあるんです。たゞ問題は輸送関係」、「コーパルガムなんかもセレベス方面に多量に産出しますので、これも輸送関係さへ円滑に行けば楽観的に考へられます」との記述があるが、結局輸送が問題となり、十分な量は供給されなかったものと思われる。

2-1-2. カーボンブラック

カーボンブラックは、石油ガスの不完全燃焼や熱分解で生じる煤を集めた黒色の微粉末である。当時の用途はゴムの充填剤が大部分で、他に印刷インクの顔料、コピー用紙、タイプライター用のリボン、墨汁、靴墨

等があり、レコードへの使用は主流ではなかった〔白崎・佐久間 1938 : 331 - 332〕。しかし盤の色と艶をつける、滑りを良くする、強靱性を増すという効果があり、材料として不可欠であった〔増澤他 1943, 安藤発言〕。戦前の日本はアメリカに次ぐ世界第2のカーボンブラック生産国となっていたが、生産高は国内需要の1/3に満たず、アメリカからの輸入に頼っていた。このため日中戦争期にはアセチレンガスを利用した代用品も検討された〔白崎・佐久間 1938 : 332 - 334〕。しかしアジア・太平洋戦争期の文献でも、「生産量は相当ありますが、生ゴムの製産等に使われますから、重点主義で、現在はレコード界には全然配給されません」「代用品にはいろいろなものがあると思ふんですが、勿論カーボンブラック程のものはありません」〔増澤他 1943, 安藤発言〕、「南方からの輸送を俟たなくてはならない」〔山内 1943〕と述べられていることから、国内需給や代用品生産は追いつかなかった様子がわかる。

2-2. 古レコードの回収

シェラック等の材料は貴重品であることから、古レコードの回収・再生利用は戦前から行われていた。例えば日東蓄音器株式会社（以下、日東蓄）では、大正時代に、古・屑レコード数枚と新品1枚とを交換するサービスを行っていた〔岡田 1991a〕。しかし戦時期のレコード材料の欠乏は、古レコードを回収・再生利用する、より強力な動機となった。

日中戦争期には、レコード製造業者の団体である全国蓄音器レコード製造協会^(注6)が、古レコードの回収運動を繰り返し行っていた〔青木謙 1941〕。例えば1941（昭和16）年には、大日本青少年団、国防婦人会等と協力して、満蒙開拓青少年義勇軍に送る慰問レコードの購入費獲得を目指した回収運動を行い、全国から最終的に600万枚以上の古レコードを回収した〔青木謙 1941a ; 深澤 1942〕。特に11月には、1ヶ月で14万枚が回収されたことが報じられている。これらの古レコードは、同協会の斡旋で各レコード会社に買い取られた〔青木謙 1941a〕。しかし青木謙〔1941〕は、当時唯一のレコード雑誌であった『レコード文化』の巻頭言で、「これも死蔵レコードの全体から見たら、恐らく九牛の一毛に過ぎない」と評し、「従来の回収運動は主としてレコード会社側に依って行はれてきた為、兎角営利的な印象を与へ、真剣性に乏しい嫌があつた」ので、「レコード界全体の問題として

古レコードの大々的な回収運動を提唱したい」と述べている。

2-3. 敵性音楽の追放

アジア・太平洋戦争が始まると、直後に情報局は米英系音楽（＝敵性音楽）排除の方針を定めた「戦時下米英系音楽に対する緊急措置」を決定し、業者に敵性音楽レコードの製造・販売を自主規制するよう呼びかけた〔小川 1942〕。『レコード文化』誌上でも「今日各家庭に持つてゐるアメリカ風の卑俗猥雑なレコードや、一時日本で流行した愚劣な流行小唄のレコードを全部資材として提供してもらひたい。それをたゞきつぶすといふとシェラックは当分の間不自由しないだらう」〔あらえびす他 1942, あらえびす発言〕など、早速資材回収と結びつけた議論が展開された。

1943（昭和18）年1月には上記措置の趣旨を徹底させるため、情報局と内務省によって、廃棄すべきレコードの具体例を示した「米英音楽作品蓄音機レコード一覧表」が発表された〔情報局・内務省 1943〕。これを受けた大阪市の事例では、市当局が中心となり、各蓄音機店を「市指定敵性音盤供出相談所」として、5月1日より1枚10銭で市民からの敵性レコード供出を受け付けた〔青木謙 1943a〕。さらに、供出の際に発行される証明書を入場券とするコンサートを実施するなどして、供出の促進を図った〔青木謙 1943c〕。

同時期には内務省の指揮の下、町内会単位でも敵性レコードの供出を受け付けていた。神奈川県寒川町の事例では、個人宅を「藤澤警察署指定音盤買上所」として、1枚10～12銭での供出を求める旨が通知された。通知は1943（昭和18）年2月に、町長から各町内会長に向けて行われ、「爾後当局デ取締ヲ実施シマスガ其ノ時ハ治安警察法第十六條（供出セズ後デ当局ニ判ツタ時ハ）ニ依リ嚴罰セラレマス」との文言も添えられていた〔鳥養 2016〕。

全国蓄音器レコード製造協会の後継団体である日本蓄音機レコード文化協会^(注7)でも、情報局・文部省・内務省の指揮の下、当該レコードの販売店からの引き上げや、一般からの供出の斡旋を行った〔情報局 1943〕。『レコード文化』誌も、同協会の後援で1943（昭和18）年2月から回収運動を展開した〔青木謙 1943〕。読者からの供出は他の古・屑レコードとともに無償で行われ、4月末までに約150枚が回収された。これを古レコード共同買入所に委託し

て得た代金は、陸海軍恤兵部に献金された〔青木謙 1943；青木誠 1943d〕。

敵性レコードの回収運動では、主にジャズ音楽が敵愾心を煽る象徴となった。「卑俗低調で、頹廢的、煽情的、喧噪的なものであつて、文化的にも少しの価値もない」〔情報局 1943〕、「ジャズのレコードが国内から一枚も無くなつたら定めしいゝ気持でせうね」〔あらいびす他 1943, 青木発言〕と断じられ、「ジャズ・レコードを葬れ」「敵国のレコードを所有するのは好楽家の恥だ」〔注8〕等のスローガンが生まれた。このため現在でも、戦時期のレコード回収というと、ジャズ音楽が連想されることが多いようである。

2-4. レコード生産の衰退

2-4-1. 製造・販売統制

レコードと蓄音機の製造は、日中戦争開始直後から始まった金属使用規制によって著しく制限された。

銅製品の製造を規制した「銅使用制限規則」(昭和12年商工省令第28号)は、昭和13年商工省令第73号で強化改正され、蓄音機を製造する際に銅や銅合金を使用することは、1938(昭和13)年8月15日から原則禁止となった〔注9〕。

鉄製品の製造を規制した「鉄鉄铸件ノ製造制限ニ関スル件」(昭和13年商工省令第19号)では、レコード製造用の機械への鉄鉄使用を、1938(昭和13)年7月15日から原則禁止した〔注10〕。また「鋼製品ノ製造制限ニ関スル件」(昭和13年商工省令第49号)では、蓄音機・蓄音機用針・レコード製造用の機械への鋼材使用を1938(昭和13)年8月15日から原則禁止した〔注11〕。これら2省令は「鉄製品製造制限規則」(昭和16年商工省令第82号)で統合強化され、指定物品の製造に鉄を使用することは、1941(昭和16)年9月25日から原則禁止とされた。この指定には新加物品も多数含まれているが、レコード関連の物品については、統合前の指定がそのまま引き継がれている〔注12〕。すなわち、レコード関連の物品の製造は、1938(昭和13)年の段階で既に厳しく規制されていたと言える。

製造制限を受けた物品の販売は、「奢侈品等製造販売制限規則」(昭和15年商工省・農林省令第2号)によって統制された。これにより銅使用制限規則、鉄鉄铸件ノ製造制限ニ関スル件、鋼製品ノ製造制限ニ関スル件で製造が禁止された、蓄音機・蓄音機用針・レコード製造用の機械は、1940(昭和15)年10月7

日から原則販売禁止となった〔注13〕。

2-4-2. 税の高騰と生産量減少

レコードと蓄音機は「比較的贅沢品、奢侈品と認められる物品」とみなされたことで、日中戦争開始直後に制定された北支事件特別税法(昭和12年法律第66号、1937年8月11日施行)で物品税の課税対象となった〔大蔵省昭和財政史編集室 1957:415〕。税率は20%で、当初は1938(昭和13)年3月31日以前の取引に限定したものであったが、続く法令によって恒久化された。税率の改定も頻繁に行われ、アジア・太平洋戦争の初期には50%、末期には120%まで引き上げられた〔関野 2017〕。

生産量について見ると、蓄音機の生産台数は1937(昭和12)年をピークに下降の一途をたどっている〔倉田 2006:227〕。またレコードの生産枚数は、株式会社日本蓄音器商会(以下、日蓄)の例では、1936(昭和11)年と39(昭和14)年にピークがあり、その後は減少している〔大久保 2015〕。アジア・太平洋戦争期のレコードの生産衰退の要因については、前述した資材欠乏や製造・販売統制、高税率による需要の減少に加え、電気・石炭や労働力の不足〔増澤他 1943, 安藤発言〕、製造者の工場設備の大部分が軍需品生産に転換されたこと〔伊藤 1971:143-144〕など、複合的な要因が指摘されている。

2-5. 代用材料としての利用

レコード盤が代用材料として日用品製造に用いられるようになった経緯や時期は不明である。ただ画鋲の例では、材料としてレコード盤を想定したと思われる実用新案の出願が1942(昭和17)年10月14日から確認できるうえ、前出の株式会社ミツヤには1941(昭和16)年からレコード盤製画鋲を製造していたとの伝承がある〔木村 2016〕。これらと実物資料の情報とを合わせることで木村〔2016〕は、レコード盤製画鋲が、(1)主にアジア・太平洋戦争期に製造されていたこと、(2)他の代用材料製の画鋲に比べ、特に戦争末期まで製造されていたこと、(3)様々な業者が参入し生産量が多く、普及度も高かったこと、を明らかにした。しかし現時点で、レコード盤を代用材料として利用したことを明記した戦時期の文献や、画鋲以外の実物資料は見つかっていない。筆者所蔵の画鋲の実物資料で、箱に「レコード」と明記されているものも15種中1種のみである(図1c)。第1章で挙げた近年

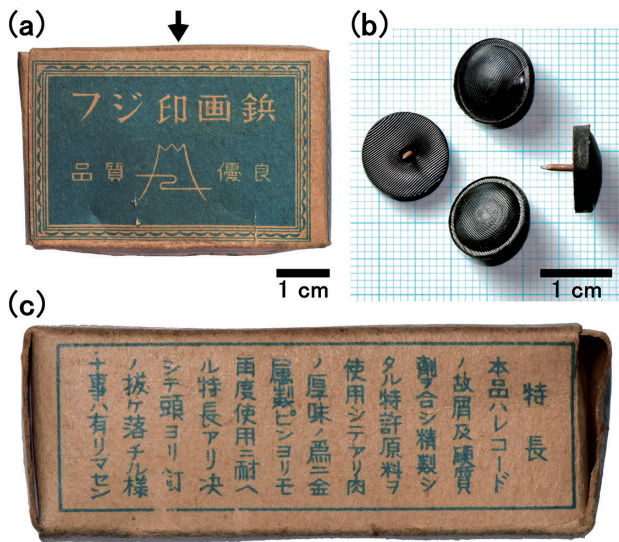


図1:レコード盤製画鋏の実物資料例(資料番号05608)。(a)箱の天面。矢印は(c)の側面の位置。(b)中の画鋏の一部。(c)側面の拡大図。

の諸説を検証するためにも、実物資料と文献の発掘や、既存の資料の分析による実態把握が待たれている。

3. データ・手法

本研究のメインは、レコード盤製画鋏の実物資料から、元盤に関する情報を抽出し、同定する作業である。本章では、研究に用いたデータ(画鋏とレコードの実物資料、文献、画像データ)と手法について、段階を追って説明する。

3-1. レコード盤製画鋏の実物資料

レコード盤製画鋏の実物資料は、現在の画鋏メーカーにも保存されておらず、かつては戦災でほぼ全てが失われたのではないかと憶測すらあった^(注14)。しかし近年の古物市やネットオークションの発展の結果、研究に資するに足る資料数が確保できるようになった。筆者は1998年3月4日～2018年1月12日に、箱付きの資料15種類45箱3,892個、画鋏単体の資料412個の計4,304個を収集した。これらの実物資料は、レコード盤を円形にくり抜いた黒色の画鋏頭部に、針部となる釘を直接埋め込むことで製造されている。資料の観察から、くり抜きや釘の埋め込みは、レコード盤を加熱軟化させて行っていたことがわかる。劣悪な製造状況のためか、頭部が欠けた製品や、釘の埋め込みに失敗した製品も散見される。頭部の直径は製品の規格によって異なり、9mmから15mmまで様々である。頭部上面は緩い球面形状をなすように成形されている場合が多いが、加熱は低温であったようで、焼損は見ら

れない。このため元盤の状態は非常に良く保存されており、レコードの溝は実物資料の大半に残されているうえ(図1)、レーベルの付着や刻印が認められる資料も存在する。本研究では、対象をレーベルに絞って元盤の同定を行うこととし、全資料4,304個から、レーベルの付着が認められる資料136個を抽出した。その多くは、レーベルの縁部分の僅かな断片のみであるが、頭部全面にレーベルが付着した資料も一定数抽出された。

3-2. レーベル画像との比較

画鋏から得られたレーベルの断片は、完全なレーベルの画像資料と比較・照合することで、元盤の製造者・製造時期・演奏者・曲種を同定できる。目視比較による初期的な同定には、昭和館[2003]や、岡田[1991b-d, 1992a, b, 1993]等の文献中のレーベル画像の他、インターネット上の個人ページ、オークションサイト、古書販売サイト等で閲覧可能なあらゆる画像を用いた。さらに詳細な同定の際には、筆者がレコードの実物資料も収集した後、撮影し、画鋏の実物資料の写真とスケールを合わせて画像照合を行った。照合には、グラフィックソフト(Adobe Photoshop、ACD Canvas)の画層・色調加工・拡張機能等を用いた。

3-3. レコードリストの検索

レーベルの断片から文字を読み取れる資料については、それを手掛かりに既存のレコードリストを検索し、元盤の同定を試みた。本研究で用いたリストは、下記の3つである。

1) 昭和館リスト

『SPレコード60,000曲総目録』[昭和館2003]は、昭和館が所蔵・管理している約3万枚のSPレコード盤の実物資料を用いて作成された、6万件に達する曲のリストである(以下、「昭和館リスト」)。全ての情報がレーベルから直接読み取られている点と、様々なレコード事業者から発売された、1903(明治36)年から1960年頃までの広い年代の資料をカバーしている点が特色である。一方、目録の編集時点で収集し得た実物資料のみに基づいているため、リストに抜けが多い点には注意が必要である。

2) みなみリスト

歌手・レコード収集家のみなみ一郎氏による「ツバメ印ニットー盤年表」[みなみ1978a-1980b]

は、日東蓄から発売されたレコードのリストである(以下、「みなみリスト」)。氏が収集した実物資料に加え、新譜月報や新聞の情報も用いて、1920(大正9)年の創業から1925(大正14)年5月頃までに発売されたほぼ全ての曲をカバーしている点が特色である。一方、レーベルに記載された情報だけではない点と、この期間以降に発売された曲は抜けている点に注意を要する。

3) 文楽劇場リスト

『義太夫 SP レコード集成 ニットー篇 I』〔国立文楽劇場 1991〕には、日東蓄から発売された大正期(1921~1926(大正10~15)年)の義太夫節のレコードリストが付録されている(以下、「文楽劇場リスト」)。曲種が義太夫節に限定されており、年代も「みなみリスト」とほぼ重複しているが、レーベルの地色に関する情報が付加されている点が特色である。

4. 結果

結果として、7個の実物資料に使用された元盤の製造者を同定し、その製造時期の範囲を推定した(表1)。このうち2個については、演奏者と曲種の同定にも成功した。以下、7個の資料それぞれを、固有の所蔵番号で示し、同定の詳細を述べる。これらは全て箱付きの資料であったため、所蔵番号は「(箱番号5桁)-(箱の中の画鋏の固有番号)」で与えた。なお本章では画鋏頭部の指で押す側を表、針が植えられている側を裏と呼ぶ。

4-1. 実物資料 01343-1

この資料は、画鋏頭部裏側に青色・金色の図案と白抜き文字(図2a左)、表側に赤色地に金色の文字が見られる(図2b左)。レーベルの部分だけを切り出し(図2中)、色調加工とモノクロ化を施すと、裏側には「一レ」と前後の文字の断片(図2a右)、表側には「本」「鶴」と、それに続く文字の断片が確認された(図2b右)。

裏側の図案をレーベル画像と目視比較したところ、「一レ」は「ニットーレコード」の一部、青色と金色の図案は商標である燕の図案の足元部分であり、日東蓄の1920~1928(大正9~昭和3)年のレーベルデザインと判明した〔岡田 1991c〕。そこで「昭和館リスト」の日東蓄の項目と「みなみリスト」を用い、曲名や演奏者名に「本」「鶴」の両方を含む曲を抽出したところ、両リストで重複を含む3,154曲中、98曲が該当した。さらに、(1)画鋏表側の文字は、文字

表1: 製造者・製造時期等が同定された画鋏の実物資料リスト

資料番号	製造者	製造時期	演奏者・曲種
01343-1	日東蓄	T10~S3	竹本越登太夫・鶴澤浅造の義太夫節
01343-2	大阪蓄または東洋蓄	T1~T8頃	—
01975-1	興亜	S17頃	青空コドモ會の紙芝居
01975-2	太平蓄	S5~S17	—
01975-6	講談社	S11~S18	—
01975-7	日本ビクター	S2~	—
05728-1	日東蓄	T9~S3	—

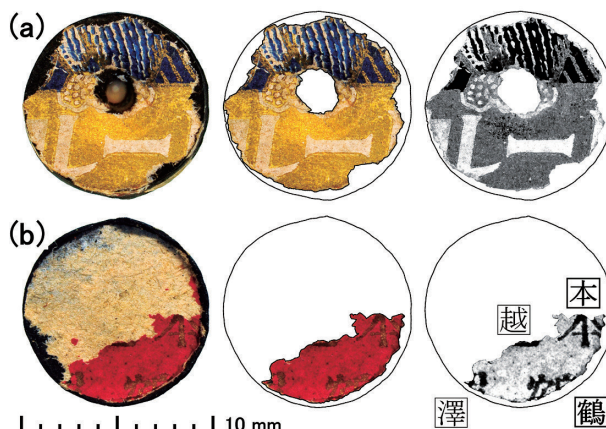


図2: 画鋏の実物資料01343-1の(a)頭部裏側と(b)表側。(左)原色、(中)レーベル部分のみ切り取り、(右)色調加工後にモノクロ化。(b)右には、本資料のみから読み取れる漢字を太字、文献から類推される漢字を細字で配した。

サイズから曲名ではなく演奏者名の可能性が高いこと、(2)「本」「鶴」以外の文字断片の情報、(3)「文楽劇場リスト」のレーベル地色の情報との整合性、も考慮して絞り込むと、竹本越登太夫(たけもとこしとだゆう、語り)・鶴澤浅造(つるざわあさぞう、三味線)の義太夫節のみが該当した。

すなわち図2b右の文字は右横書きで、上段が「竹本越登太夫」の「本」と、「越」の右下部分、下段が「鶴澤浅造」の「鶴」と、「澤」の右上部分と考えられる。しかし今回用いた3リストは、いずれも1920~1928(大正9~昭和3)年の製品全ては網羅されておらず、異なる演奏者・曲種の可能性も残っている。そこで本研究では、竹本越登太夫・鶴澤浅造による日東蓄のレコードの実物資料も収集し、さらなる検証を行った。収集は2009~2017年に行い、得られた21演目56枚の盤(資料番号N01~N56)から、112面のレーベル画像データ(盤1枚につき、A面とB面の2面)を作成した。

図案の微小な差異により、56枚中23枚は画鋏の資料と一致しないことが目視で確認できたため(注15)、残りの33枚66面のレーベルを、グラフィックソフ

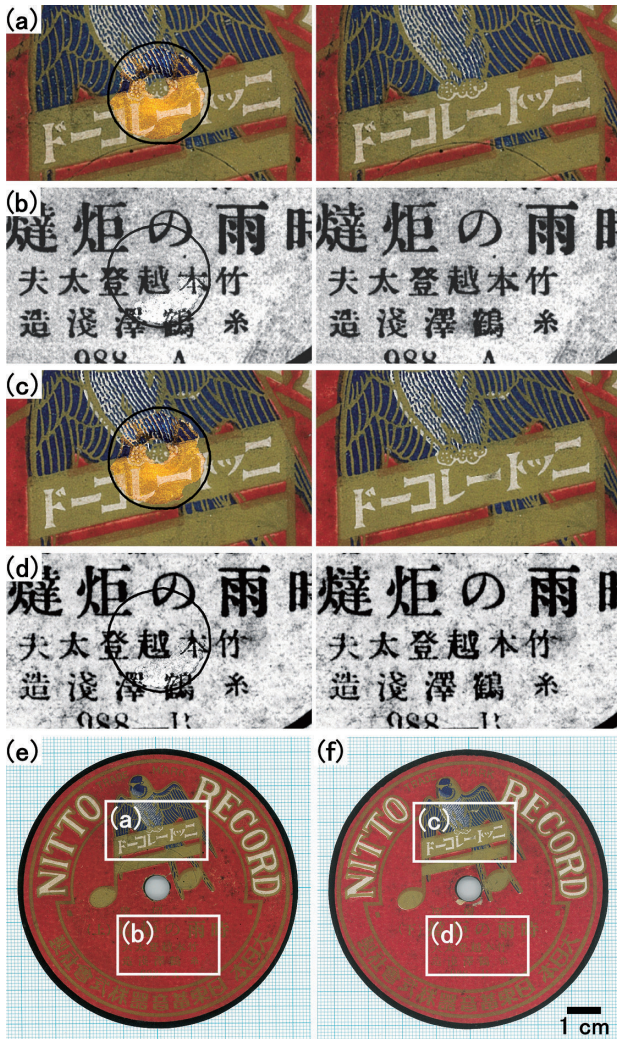


図3:ニッポレコード『時雨の炬燵(上下)』のレーベル画像に図2を重ねたもの。
 (a) A面レーベル×画鋏裏(本文①)、(b) A面レーベル×画鋏表(同②)、(c) B面レーベル×画鋏裏(同③)、(d) B面レーベル×画鋏表(同④)。それぞれ左が画鋏の画像あり、右が画像なし。(a) (c) は原色、(b) (d) は色調加工後にモノクロ化。(e)、(f) はそれぞれA面とB面レーベル全体で、(a)～(d)で拡大した箇所を白枠で示した。元盤は「①が一致し、かつ④も一致」または「②が一致し、かつ③も一致」のどちらか一方が満たされていなければならないが、この例では両方とも満たされている。レコード資料は筆者蔵(資料番号 N32)。

トで画鋏の画像と照合した。1枚の盤について、① A面レーベル×画鋏裏、② A面レーベル×画鋏表、③ B面レーベル×画鋏裏、④ B面レーベル×画鋏表、の4ケースの照合を行い、計132ケースの結果を得た。画鋏裏側の画像との比較では、多くのケースで一致が見られたが、図案のサイズが異なり不一致となるケースも散見された。画鋏表側の画像との比較では、文字サイズや文字間隔が大きく異なるなど、ほとんどのケースで不一致となった。画鋏は1枚のレコード盤をくり抜いて作られているので、元盤は「①が一致し、かつ④も一致」または「②が一致し、かつ③も一致」のどちらか一方を満たさなければならない。結果として、この条件を満たすものは、演目『時雨の炬燵』の盤1

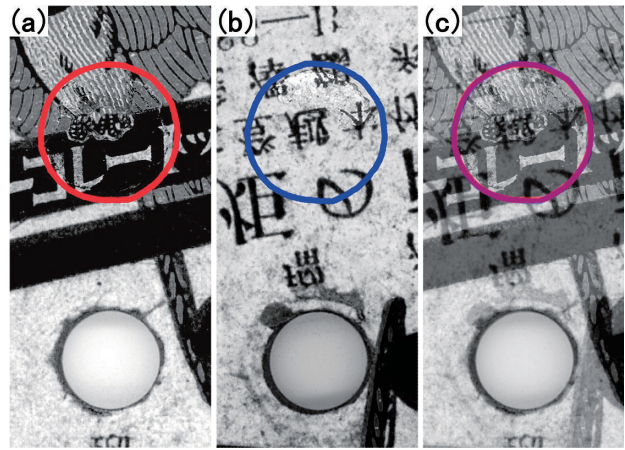


図4: 図3のレコード両面の、画鋏で切り取られる位置と中心穴との関係。(a) A面レーベル×画鋏裏(本文①)。画鋏で切り取られる位置は赤枠。図3aを色調加工・モノクロ化し、赤枠が中心穴の直上に来るよう微回転させた。(b) B面レーベル×画鋏表(本文④)。画鋏で切り取られる位置は青枠。図3dを反転後、青枠が中心穴の直上に来るよう回転(本文参照)。(c) (b)を半透明化し、(a)に重ねたもの。

枚(資料番号 N32)のみであることが判明した(図3)。

図3はA面とB面を独立に照合した結果であるので、ここではさらに両面の関係を確認する。1枚のレコード盤をくり抜いた場合、画鋏で切り取られるA面とB面のレーベルの位置は、レコードの中心穴に対して一致するはずである。そこで以下のような手順で検証を行った：(1) 画鋏で切り取られる位置が中心穴の直上に来るように回転させたA面レーベルの画像を用意する(図4a)、(2) B面レーベルの画像を反転させ、A面側(レコードの裏側)から透かして見た状態にしたのち、画鋏で切り取られる位置が中心穴の直上に来るよう回転させる(図4b)^(注16)、(3) (2)の画像を半透明化して(1)の画像に重ねる(図4c)。図4cからは、画鋏で切り取られる位置が両面で極めて良く一致していることが見て取れ、元盤同定の確度はさらに上がったといえる^(注17)。

ただ、当時はレーベルの地のストックに、あとで演目等を印刷していたことから、同一演目でも製造時期の違いによって文字配置等が大幅に異なる場合がある^(注18)。また竹本越登太夫・鶴澤浅造による義太夫節は、1921～1925(大正10～14)年にかけて28演目が発売されたが〔国立文楽劇場1991:74-83〕、筆者が収集できたレコードは21演目のみである。従って『時雨の炬燵』以外の演目が該当する可能性は依然として残っているものの、画鋏の元盤が竹本越登太夫・鶴澤浅造による義太夫節の盤であることは、高確度で同定できたと考えられる。元盤の製造時期は、両名によるレコードの発売開始時期を上限、同一デザイ

ンのレーベルの製造終了時期を下限にとり、1921～1928（大正10～昭和3）年と推定した。

4-2. 実物資料 01343-2

この資料は、画鋏頭部表側に淡緑色地に白抜きと金線で描かれた図案が見られる（図5a左）。写真に色調加工とモノクロ化を施すと、地球の図案のうち、北海道・樺太・北方4島あたりを切り取ったものであることがわかった（図5a右）。レーベル画像と目視比較を行った結果、大阪蓄音器株式会社（以下、大阪蓄）の「ナショナルレコード」、または東洋蓄音器合資会社（以下、東洋蓄）の「オリエントレコード」のどちらかと推定された。筆者所蔵のオリエントレコードのレーベル例は図5b, cに示した。この例ではサイズや細部のデザインが異なっているが、画鋏に見られる図案とほぼ同一である。大阪蓄は1912（大正元）年10月の設立で、1917（大正6）年1月に東洋蓄に併合された〔高橋 2011〕。東洋蓄は1914（大正3）年の設立で、1919（大正8）年12月に日蓄に買収された〔岡田 1991b〕。地球デザインのレーベル使用は、大阪蓄と東洋蓄の存在期間にほぼ限定されるので、画鋏の元盤の製造時期は、1912（大正元）年から1919（大正8）年頃までと推定された（注19）。演奏者・曲種に関する情報は得られなかった。

4-3. 実物資料 01975-1

これは釘の埋め込みに失敗した頭部だけの資料であり、釘頭を押し付けた痕跡がある側を裏とした。頭部表裏に白色地に黒色・金色で印字された漢字・カタカナ・アルファベットや、金色・青色のレーベルの縁取りが見られる（図6a, b）。裏側から読み取れる「モ會」という文字列（図6a）を「昭和館リスト」から検索したところ、興亜文化録音株式会社（以下、興亜）が発売した「コアレコード」のうち、青空コドモ會という団体による紙芝居トーキーの盤の可能性が高まった。

「昭和館リスト」には青空コドモ會による演目として『（武人の模範）飯塚部隊長』と『（軍事美談）愛馬の戦死』の2つが挙げられている〔昭和館 2003：683〕（注20）。そこでネットオークションのサイトに残されていた『愛馬の戦死』の出品画像を参照したところ、細部は異なるものの、画鋏の資料とほぼ同一のデザインであることが確認できた（図6c, d）。一方で、九州大学総合研究博物館所蔵の『愛馬の戦死』は、全く異なるレーベルデザインである（注21）。また『飯塚

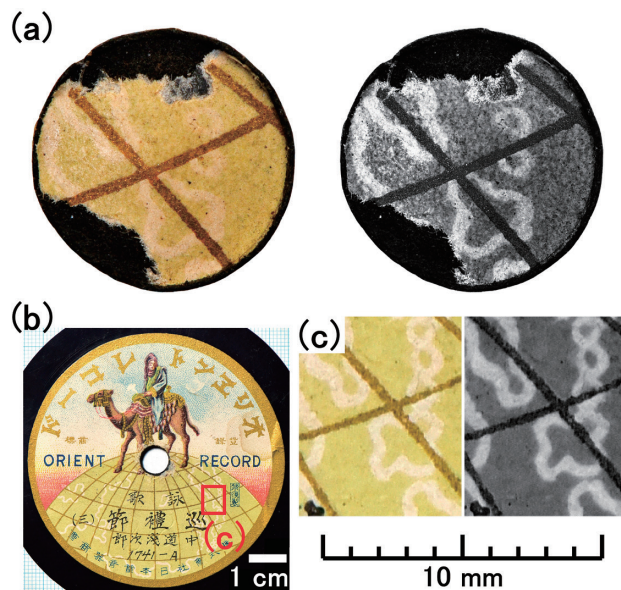


図5：画鋏の実物資料01343-2とレコードレーベルとの比較。(a)画鋏の表側。左は原色、右は色調加工後にモノクロ化。(b)東洋蓄「オリエントレコード」のレーベル例。(c) (b)の赤枠部分を拡大したもの。左は原色、右は色調加工後にモノクロ化。スケールは(a) (c)共通。レコード資料は筆者蔵（資料番号001）。

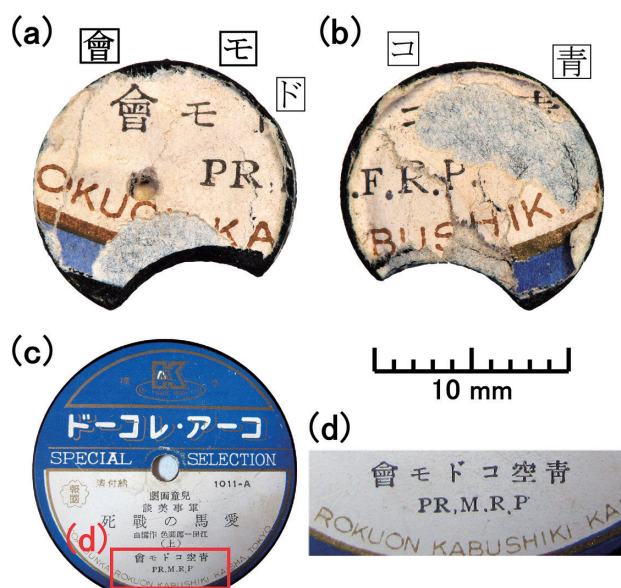


図6：画鋏の実物資料01975-1とレコードレーベルとの比較。(a)画鋏の裏側と、(b)表側。本資料のみから読み取れる漢字・カタカナを太字、文献から類推される漢字・カタカナを細字で周囲に配した。(c)コアレコード『愛馬の戦死(上下)』のレーベル。(d) (c)の赤枠部分を拡大したもの。レーベル画像はヤフオク! (<https://page.auctions.yahoo.co.jp/jp/auction/e244814333>)より取得（投稿時点でリンク切れ）。

部隊長』にも同様なデザインの盤があるのか、青空コドモ會による他の演目の盤があるのか、については不明である。コアレコードは昭和のマイナーレーベルであり、実態について不明な点が多いようであるが〔岡田 1992a〕、筆者が確認できる範囲の資料では、発売されていたレコードは全て、戦時色を反映した紙芝居である。従って現時点で演目の特定にまでは至らない

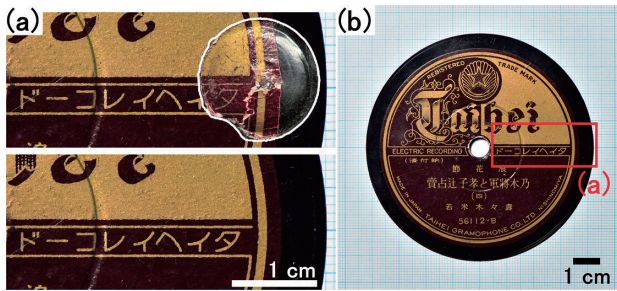


図7:画鋏の实物資料01975-2とレコードレーベルとの比較。(a) 上段白枠内が画鋏の表側。背景は太平蓄「タイハイレコード」のレーベル例を拡大したもの。下段は画鋏の画像なし。(b) レーベル例の全体。赤枠部分が(a)で拡大した箇所。レコード資料は筆者蔵(資料番号002)。

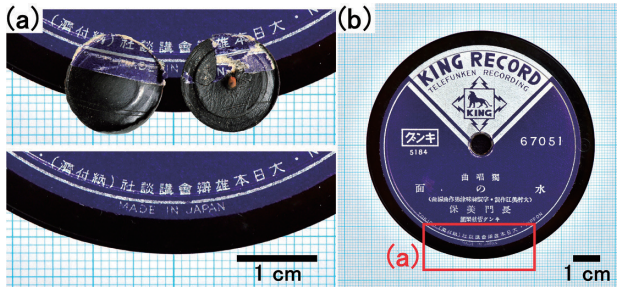


図8:画鋏の实物資料01975-6とレコードレーベルとの比較。(a) 上段左が画鋏の表側、右が画鋏の裏側。背景は講談社「キングレコード」のレーベル例を拡大したもの。下段は画鋏の画像なし。(b) レーベル例の全体。赤枠部分が(a)で拡大した箇所。レコード資料は筆者蔵(資料番号003)。

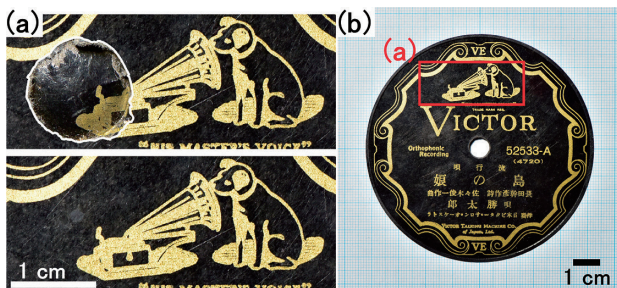


図9:画鋏の实物資料01975-7とレコードレーベルとの比較。(a) 上段白枠内が画鋏の表側。背景は日本ビクターのレーベル例を拡大したもの。下段は画鋏の画像なし。(b) レーベル例の全体。赤枠部分が(a)で拡大した箇所。レコード資料は筆者蔵(資料番号004)。

ものの、元盤が青空コドモ會による紙芝居の盤であることは、ほぼ間違いのないと思われる。元盤の製造時期は、古書販売サイトで得られた同一シリーズの他演者の紙芝居の発行年から、1942(昭和17)年頃と推定した(注22)。

4-4. 实物資料01975-2

この資料は画鋏頭部表側に、茶色地に金色で描かれた図案とカタカナが見られる(図7a)。筆者所蔵のレーベル(図7b)と画像照合を行った結果、カタカナは右横書きの「タイハイレコード」の「タ」と、続く「イ」の一部であり、太平蓄音器株式会社(以下、太平蓄)の盤と同定された。太平蓄は1930(昭和5)年11月

に設立された後、1935(昭和10)年に日東蓄と合併し大日本蓄音器株式会社(以下、大日本蓄)となるも、1942(昭和17)年2月に大日本雄弁会講談社キングレコード部(以下、講談社)に買収された[岡田1991d; 大久保2015]。図7のレーベルは太平蓄~大日本蓄時代に用いられていたため[岡田1991d]、画鋏の元盤の製造時期は、1930~1942(昭和5~17)年と推定された。演奏者・曲種に関する情報は得られなかった。

4-5. 实物資料01975-6

この資料は画鋏頭部表裏に、青色地に銀色で線や漢字・アルファベットが印字された、レーベルの縁部分が見られる(図8a)。読み取れる漢字「本雄」「社」は、右横書きの「大日本雄弁会講談社」の一部であり、講談社の「キングレコード」の盤と同定された。筆者所蔵のレーベル(図8b)と画像照合を行った結果、配色と文字配置が極めて良く一致した。またアルファベットは「MADE IN JAPAN」の一部と判明した。

講談社は当初日本ポリドールに吹き込み・プレスを委託していたが、1936(昭和11)年9月より自社製造を開始した[大久保2015]。1943(昭和18)年5月には、敵性語の追放によって「富士音盤」に改称された[青木誠1943b; 岡田1992b]。図8bのレーベルは自社製造開始後のもので、富士音盤への改称後も基本デザインは同一であったが[岡田1992b]、筆者が画像を確認した範囲では、改称後は「MADE IN JAPAN」の文字が削除されたようである。従って画鋏の元盤の製造時期は、1936~1943(昭和11~18)年と推定された。演奏者・曲種に関する情報は得られなかった。

4-6. 实物資料01975-7

この資料は画鋏頭部表側に、黒色地に金色で描かれた図案が見られる(図9a)。筆者所蔵のレーベル(図9b)と画像照合を行った結果、この図案は犬が蓄音機に耳を傾ける「ニッパー・マーク」の一部であり、日本ビクター蓄音器株式会社(以下、日本ビクター)の盤と同定された。日本ビクターは1927(昭和2)年9月に米国ヴィクターの全額出資で設立され、日蓄と並ぶ戦前の二大レーベルとなった。レーベルデザインは戦前・戦時期を通して大きく変更されることがなかったので[岡田1993]、画鋏の元盤の製造時期は、1927(昭和2)年以降としか制約できない。また演奏者・曲種に関する情報は得られなかった。

4-7. 実物資料 05728-1

この資料は画鋏頭部裏側に、赤色地に金色で文字の断片や線が印刷されたレーベルの縁部分が見られる(図10a)。筆者所蔵のレーベル(図10b)と画像照合を行った結果、4-1章同様、日東蓄の1920~1928(大正9~昭和3)年のレーベルの一部であることが判明した(図10c)^(注23)。演奏者・曲種に関する情報は得られなかった。

5. 考察

今回同定に成功した実物資料7個(表1)の元盤は、6つの異なる製造者の製品であった。また推定された元盤の製造時期も、大正初期から戦時期までと幅が広い。特に箱番号が同一の資料(01343の2資料と、01975の4資料)は同じ箱に入っていたものであり^(注24)、画鋏製造の際には様々な製造者・製造時期の雑多なレコード盤がない交ぜに用いられていた様子が推察される^(注25)。また今回同定した曲種は、義太夫節と戦時色の強い紙芝居であり、松尾〔2007〕で述べられている敵性音楽や恋愛物ではなかった。製造時期がばらついていることから、元盤がミスプレス盤とも考えにくい。よってこの結果は、廃品として回収された古レコード盤が、代用品に再生利用されたという岡田〔1991a〕の記述を、初めて実証するものと考えられる。

第2章では、日中戦争の開戦以来レコードの資材が不足するようになり(2-1章)、日中戦争期の終わりからアジア・太平洋戦争期にかけて大量の古レコード盤が回収されたものの(2-2、2-3章)、これに逆行するように蓄音機やレコードの生産は衰退した様子を概観した(2-4章)。このような状況は、回収されたレコード盤を、代用材料として他の日用品製造に用いるアイデアを生んだと推察される。木村〔2016〕によると、アジア・太平洋戦争初期の1941、2年の段階で、既にレコード盤で画鋏製造が行われていた可能性が高い(2-5章)。これは敵性レコードの回収が本格化する1943年1月以前である。ジャズ音楽の追放は人々の記憶に強く残っているが(2-3章)、曲目の母数から見ると、日中戦争期から回収されていた一般的な古レコードに対して、敵性レコードが占める比率は少ないと考えられる。また当時の製造環境でミスプレス盤が数多く発生していたとも考えにくい。従ってレコード盤製画鋏の元盤として、敵性レコードやミスプレス盤が用いられたケースがあったとしても、雑多な

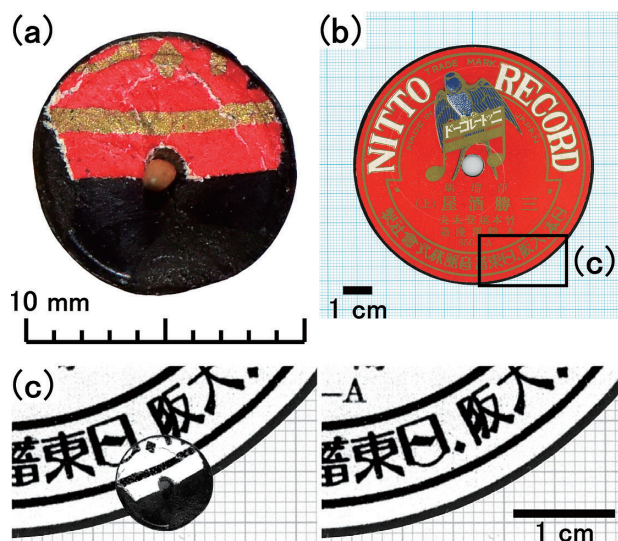


図10: 画鋏の実物資料05728-1とレコードレーベルとの比較。(a) 画鋏の裏側。(b) 日東蓄「ニットーレコード」のレーベル例。(c) (b)の黒枠部分を拡大し、(a)の画像を重ねたもの。色調加工後にモノクロ化。左が画鋏画像あり、右が画像なし。レコード資料は筆者蔵(資料番号N35)。

古レコードが元盤である蓋然性が最も高い。本研究の結果は、このような観点からも支持される。

本稿の同定作業は、主に筆者が収集したレコード資料に拠ったことで、参照可能なレーベルに制約が生じてしまった。レーベルは楽曲に付随した情報と捉えられがちだが、本稿の結果が示す通り、それ自体も極めて価値の高い資料である。博物館等で収集された膨大なレーベル画像が、高解像度で一般にも供されるようになれば、様々な分野に有益と考えられる。今回同定した7個以外にも、まだ同定の可能性が残された資料が存在するので、今後も作業を継続して結果の拡充を図っていきたい。

本研究で収集した画鋏の実物資料では、レーベルの付着は全体の約3%にしか見られず(4,304個中136個)、その多くはレーベルの縁部分の僅かな断片のみであった。一般的な10インチ盤(半径5インチ=12.7cm)に半径4cmのレーベルが貼られている場合を考えると、ランダムにくり抜きを行った場合、レーベルが付着した資料は10%程度現れるはずである。レーベルの付着は製品としての見映えが悪く、また針を埋め込みにくい、頭部をくり抜きにくい、といった問題もあることから、多くの場合レーベル部分の使用は避けていたものと考えられる。従って、レーベル付着の有無によらず元盤の情報を抽出できれば、資料全体をより有効に活用できる。例えば、画鋏頭部側面の裁断面に紙片が見える製品が、1箱に数~10数%程度含まれている事例がある。紙片が見える画鋏の元

盤は、レコードの中心材と表面材との間にラミネート紙を挟んで製造されていた、日蓄の盤の可能性が高い〔教育文化用品工業研究会 1950：431－432；岡田 1991a〕。よってこのような事例からも、元盤の製造者の多様性が示されるかもしれない。また大西〔2016〕はレコード盤の組成を分析することで、製造者や生産ラインに関する情報を得る手法を提案した。今後これらの点にも着目して詳細な分析を行えば、レコード盤再生利用の実態について、さらなる知見が得られると期待される。

6. 結語

本研究では、画鋲やレコード盤の実物資料と、文献情報等を組み合わせることで、レコード盤の代用材料としての側面を、初めて研究の俎上に載せた。今回同定に成功した7個という資料数は全体から見ると極めて少ないが、既存の諸説を検証する成果が得られたこと、レーベルの断片から元盤を同定する手法の提案ができたことに、一定の価値が存在すると思われる。レコード盤の代用材料としての利用は、今日のプラスチック再資源化の前史とでも言うべき、特異で興味深い事象である。その実態は依然として謎が多いが、実証的なアプローチで今後も鋭意解明に取り組んでいきたい。

謝辞

道具学会副会長の面矢慎介氏には、本稿執筆の機会を与えていただいた。道具学会研究委員会の高梨廣孝氏と、2名の査読者の方からは、数々の有益なコメントを賜った。大衆芸能研究家の岡田則夫氏、株式会社ミツヤの塚田征司氏、富永泰央氏、山内政康氏、九州大学総合博物館の大久保真利子氏、三島美佐子氏、同大人工学研究院の折田悦郎氏、株式会社DJKの岩井薫生氏には、数多くの情報とご助言をいただいた。本稿の初期的な成果を日本生活学会第45回研究発表大会で発表した折には、ものづくり大学の土居浩氏、龍谷大学の笠井賢紀氏をはじめ、出席者の方々から数々のご助言とご激励を賜った。実物資料や文献の収集は、野口聡氏御夫妻、石部誠氏、大塚銃二氏、折原勝氏、岸田知子氏、見城雅夫氏御夫妻、杉山陽一氏御夫妻、高木秀道氏、長嶋康郎氏、松尾和彦氏、国文学研究資料館、国立文楽劇場、国立音楽大学附属図書館、昭和館、その他多くの方々・機関のご助力が無ければ為し得なかった。記して感謝する。

<注>

- 1) 本稿における「戦時期」は、1937（昭和12）年7月～1941（昭和16）年12月の「日中戦争期」と、1941（昭和16）年12月～1945（昭和20）年8月の「アジア・太平洋戦争期」の全体を指す。「戦前」「戦後」はこの前後を指す。
- 2) 本稿における「代用品」は、「被代用品と用途の全部または一部が同じで、被代用品とは製法や材料が異なっていて、国際貸借の改善や不足物資の補填に寄与する必需品」と定義する〔木村 2016〕。
- 3) 1998年8月6日に本社を訪問した際の談話による。
- 4) 1941（昭和16）年7月28日の日蘭印金融協定停止を指すと考えられる。参考記事：「蘭印、果然英米に迫進 金融協定停止・資産凍結」『東京朝日新聞』1941年7月29日。
- 5) シェラックの精製に至る前段階の精製物である「シードラック」〔大阪市産業部 1939：104－105〕。
- 6) 1937（昭和12）年8月設立〔50周年委員会年史編纂 WG 1993：49〕。
- 7) 日本初のレコード製造業者の法人団体。1942（昭和17）年4月設立〔50周年委員会年史編纂 WG 1993：49〕。
- 8) 青木誠意（編）『レコード文化』3巻2号レコード文化社（1943）27,66頁
- 9) 対象物品は昭和13年商工省告示第227号で指定。
- 10) 対象物品と施行日は昭和13年商工省告示第165号で指定。
- 11) 対象物品は昭和13年商工省告示第180号で指定。
- 12) 対象物品は昭和16年商工省告示第848号で指定。
- 13) 対象法令と施行日は昭和15年商工省告示第342号で指定。
- 14) とくなが〔2000〕には「レコード盤画鋲は、戦後に長野県松本市で一つだけ発見されたことがあるらしいが、他のものはおそらく戦争で焼けてしまったようだ」との記述が見られる。松本市の事例とは、筆者の最初期の収集を指すものと思われる。
- 15) 筆者が収集した56枚の盤のレーベルデザインは、商標である燕の図案が他と大きく異なる「タイプ1」、燕が足を閉じ「大日本 日東蓄音器株式会社製」との表記がある「タイプ2」、燕が足を開き、「日本・大阪・日東蓄音器株式会社製」との表記がある「タイプ3」のいずれかに分類された。盤の内訳は、(1)「A面・B面ともにタイプ1」7枚；(2)「A面・B面ともにタイプ2」32枚；(3)「A面・B面ともにタイプ3」16枚；(4)「A面がタイプ2・B面がタイプ3」1枚、であった。このうち、画鋲裏側の図案に一致するものはタイプ2のレーベルのみであることから、(1)と(3)の23枚は除外した。
- 16) A面レーベルに対するB面レーベルの貼付向きは、盤によってまちまちであるので、回転角は検証の対象外とした。
- 17) 図3の結果では「①が一致し、かつ④も一致」と「②が一致し、

かつ③も一致」のどちらも満たされていた。元盤の条件としてはどちらか一方で十分であるので、図4の検証は「①が一致し、かつ④も一致」の場合のみについて行った。

- 18) 岡田則夫氏談。2016年7月14日。
- 19) 日蓄による買収後はレーベルデザインが一新されたとの指摘があるが〔岡田1991b〕、図5bのレーベルは、旧来のデザインに「株式会社日本蓄音器商会」と印字されている。このため買収後もしばらく旧来のデザインが使われていたと考え、元盤製造の下限を1919(大正8)年「頃」とした。
- 20) 丸括弧内の副題は、昭和館〔2003:683〕ではなく、注22の文献による。
- 21) 大久保真利子氏私信。2018年7月24日。
- 22) 古川ロッパ一座の『ワン公と隣組』が1942(昭和17)年1月20日の発行である。青空コドモ會の2演目は、そこに「既発売」と記されている。古書・古群洞のサイト(<http://kogundou.exblog.jp/20956051/>)の画像による。
- 23) 注15のタイプ3に該当する。
- 24) 箱番号01343と01975の資料はそれぞれ、木村〔2016〕表3の資料番号E-10とE-9に対応。
- 25) 資料01975には、頭部径が12mmと15mmの2種類の画鋏がほぼ同数ずつ混在しているため、木村〔2016〕ではオリジナルな製品を1つに絞ることができなかった。しかしこの2種類と同じ特徴をもつ資料は他になく、両者とも同一製造者の製品の可能性が高い。

<引用・参考文献>

- ・50周年委員会年史編纂ワーキング・グループ(編)『社団法人日本レコード協会50年史 ある文化産業の歩いた道』日本レコード協会(1993)
- ・青木謙幸「巻頭言」『レコード文化』1巻2号レコード文化社(1941)1頁;「米英・禁止レコードの回収」3巻2号(1943)15頁
- ・青木誠意(編)「開拓義勇軍へレコード二万枚」『レコード文化』1巻1号レコード文化社(1941a)62-63頁;「レコード小話」1巻1号(1941b)67-68頁;「敵性音盤の回収 大阪市当局が愈々実施」3巻4号(1943a)32頁;「各レコードの名称変更」3巻5号(1943b)30頁;「敵性音盤が入場券 軽音楽を楽しむ夕」3巻6号(1943c)26-27頁;「米・英音楽レコード回収報告」3巻7号(1943d)40頁
- ・あらえびす・中村善吉・堺和昌夫・青木謙幸(座談)「レコード叢談」『レコード文化』2巻1号レコード文化社(1942)19-22頁
- ・あらえびす・堺和昌夫・中村善吉・青木謙幸(座談)「レコード叢談」『レコード文化』3巻2号レコード文化社(1943)16-19頁
- ・深澤謙一「レコード文化協会の設立に就て」『レコード文化』2巻7号レコード文化社(1942)47,36頁

- ・伊藤正憲『レコードと共に四十五年—私のアルバム』日本クラウン(1971)
- ・情報局(編)「米英音楽の追放」『週報』328号内閣印刷局(1943)16-20頁
- ・情報局・内務省「米英音楽作品蓄音機レコード一覧表(昭和18年1月)」『レコード文化』3巻2号レコード文化社(1943)67-80頁
- ・木村源知「戦時期における金属代用品の多様性と変遷—画鋏に着目した事例研究—」『生活学論叢』28号日本生活学会(2016)1-15頁
- ・国立文楽劇場(編)『義太夫SPレコード集成 ニットー篇I』〔文楽資料叢書4〕日本芸術文化振興会(1991)
- ・倉田喜弘『日本レコード文化史』岩波書店(2006)
- ・教育文化用品工業研究会(編)『教育文化用品工業便覧』教育文化用品工業研究会(1950)
- ・増澤健美・堺和昌夫・竹越和夫・安藤穰・青木謙幸(座談)「戦時下のレコード文化に就て(下)」『レコード文化』3巻2号レコード文化社(1943)20-27頁
- ・松尾和彦「代役から主役へと昇格したセルロイド、消えたセルロイド」『セルロイドサロン』第77回セルロイドライブ러리・メモワールハウス(2007)<http://www.celluloidhouse.com/salon77.htm>
- ・みなみ一郎「ツバメ印ニットー盤年表(1)」『月刊78』29号鎌倉書林(1978a)44-45頁;「(2)(3)」『季刊78』30号(1978b)50-53頁;「(4)(5)」31号(1978c)46-49頁;「(6)(7)」32号(1978d)46-49頁;「(8)(9)」33号(1979a)46-49頁;「(10)(11)」34号(1979b)46-49頁;「(12)(13)」35号(1979c)42-45頁;「(14)(15)」36号(1979d)42-45頁;「(16)(17)」37号(1980a)42-45頁;「(18)(完)」38号(1980b)42-45頁
- ・大久保いづみ「第二次世界大戦以前の日本レコード産業と外資提携—6社体制の成立—」『経営史学』49巻4号経営史学会(2015)25-51頁
- ・大蔵省昭和財政史編集室(編)『昭和財政史 第5巻』東洋経済新報社(1957)
- ・大西秀紀「東洋蓄音器(オリエントレコード)の社史調査とディスコグラフィの作成」科学研究費助成事業 研究成果報告書 課題番号24520168(基盤研究(C),2012~2015年度)(2016)
- ・大阪市産業部(編)『世界に於ける重要商品(其の2)—繊維品其他—』〔産業部調査資料第16輯〕大阪市産業部貿易課(1939)
- ・小川近五郎「戦時下に於ける音楽レコードの諸問題」『レコード文化』2巻2号レコード文化社(1942)6-8頁
- ・岡田則夫「続・蒐集奇談5」『レコード・コレクターズ』89号ミュージック・マガジン(1991a)102-107頁;「11」95号(1991b)

- 102 - 103, 118 - 124 頁; 「13」 97 号 (1991c) 84, 92 - 98 頁; 「14」 98 号 (1991d) 84, 92 - 99 頁; 「23」 110 号 (1992a) 88, 102 - 109 頁; 「25」 112 号 (1992b) 100, 130 - 135 頁; 「26」 115 号 (1993) 80, 90 - 94 頁
- ・面矢慎介「巻頭言」『道具学論集』22号 道具学会 (2017) 1 頁
 - ・関野満夫「日本の戦時財政と消費課税—売上税を欠いた消費課税の大増税—」『経済学論纂』58巻1号 中央大学 (2017) 19 - 44 頁
 - ・白崎亨一・佐久間哲三郎『科学解説 代用品と再生品 時代産業の科学的根柢と其の実際知識』国勢社 (1938)
 - ・商工省工芸指導所(編)「拍車をかけられる代用品工業」『工芸ニュース』8巻3号 工業調査協会 (1939) 34 - 37 頁
 - ・昭和館 (監)『SP レコード 60,000 曲総目録』アテネ書房 (2003)
 - ・高橋美樹「レコードに初めて録音された沖縄音楽—1915 年『琉球新報』と大阪蓄音器の活動を通して—」『高知大学教育学部研究報告』71号 高知大学教育学部 (2011) 229 - 242 頁
 - ・とくながみつとし「モノからみるアジアと日本のココロ (5) 画鋲考」『大阪経大論集』51巻1号 大阪経大学会 (2000) 173 - 186 頁
 - ・鳥養圭美「自治会文書にみる銃後の記録—戦後 70 年を機にした展示と資料集—」『記録と史料』26号 全国歴史資料保存利用機関連絡協議会 (2016) 10 - 14 頁
 - ・山内一郎「近代戦に現れた新兵器」『レコード文化』3巻10号 レコード文化社 (1943) 17 - 19 頁

著者連絡先: kimuragenti@yahoo.co.jp

道具学論集 第24号(2018年度) 別刷り
Forum DOUGUOLOGY Study on Tools

2019年3月31日発行

発行人 / 藤本清春(道具学会会長)

編集人 / 石崎友紀・高梨廣孝(道具学会研究委員会)

発行所 / 道具学会・事務局

東京都新宿区北新宿 1-30-30 近鉄不動産柏木ハイツ 508

TEL: 050-3754-7301 FAX: 03-6685-4609

E-mail: info@douguology.jp

URL: <https://douguology.jp/>

印刷 / 株式会社グラフィック

forum**douguology**

道具学会

<https://douguology.jp/>